

草創期のメディア・スポーツ・イベントの実態

－1901(明治34)年 大阪毎日新聞社主催「長距離競走大会」に着目して－

松 浪 稔

1. はじめに

本稿で試みるのは、「そもそも、なぜメディア・スポーツ・イベントが注目されるようになったのか」という問いに答えることである。

周知の通り現代社会はスポーツに溢れている。自治体は地域のインフラ開発・整備を視野に入れ、大規模スポーツ・イベントの招致を目論む¹。我々が普段身に着ける衣服やシューズにも、スポーツ場面のために開発された素材や技術が頻繁に使用されている。新聞、テレビをはじめとしたメディアがスポーツに触れない日はない。つまり現代社会に住まう我々の生活とスポーツは切り離せない状況にあるといって過言ではない。このような現代社会とスポーツの関わり、特に高度に発達したメディアとスポーツに関する研究は、主にスポーツ社会学の視点から行われてきた²。ところが「メディアとスポーツはどのように結びつき、現在の状況に至ったのか」という問いに答える研究はこれまであまりなされてこなかったといわざるを得ない。そこで本稿では、草創期のメディア・スポーツ・イベントの実態を明らかにすることで、前の問いに答えたい。

議論を展開する前にまず、メディアという用語について確認しておきたい。現在、メディアと一言でいう場合、その多くがマス・メディアといわれる、情報を大衆に向けて媒介する活動、それを行う組織や団体、それに従事する人々や、それらの活動を支える情報媒体(新聞、テレビ、ラジオ、コンピュータ等)を指す。このメディアという概念が生み出されたのは20世紀になってからである。特に1950年頃から 情報の乗り物という意味でメディアという用語が使われるようになった。情報と情報の受け手をつなぐものという意味である。もともとメディアとは、ラテン語の「medium メディウム」の複数形「media メディア」を語源としており、「仲立ち」「中間項」という意味で使用されていた。つま

り「媒介するもの」と理解してよいだろう。19世紀には「霊媒」などの超自然的な能力を持つ者も指した。新聞がメディアとして捉えられるようになったのは、18世紀以降といわれている³。こう考えると、明治期では主に新聞、雑誌等の活字媒体が今日のメディアの働きをしたことが明らかである。

また、「メディア・スポーツ」は1990年代以降に論じられてきたテーマである。原田は「単にマス・メディアによって報道されるスポーツをいうだけでなく、スポーツ自体がメディアとして機能している現象」⁴をメディア・スポーツと定義している。本稿では、この視点を持ちつつ、メディア自らが作り出したスポーツ・イベント、すなわちメディア・スポーツ・イベント⁵に着目したい。

日本におけるメディア・スポーツ・イベントの嚆矢は東京の時事新報社が1901（明治34）年に主催した「十二時間の長距離競走」である。この大会については拙稿「日本におけるメディア・スポーツ・イベントの形成過程に関する研究」⁶で議論した。そこで本稿では、この大会の約一ヵ月後に大阪毎日新聞社が主催したメディア・スポーツ・イベントである「長距離競走大会」に着目し、その実態を明らかにする。

明治期に新聞がメディアとして機能していたこと、本稿で着目する「長距離競走大会」がメディア（＝新聞社）の主催によるメディア・スポーツ・イベントであること、さらにこのイベントに関する情報が新聞を通して大々的に発信されたことから、スポーツがメディア（媒介）として機能しコミュニケーションが成立するという視点、つまりメディア・スポーツ・イベントが情報の送り手（新聞）と受け手（読者）を媒介するという視点を確保できるだろう。この視点から、メディア・スポーツ・イベントの実態を明らかにすることで、先の「そもそも、なぜメディア・スポーツ・イベントが注目されるようになったのか」という問いに答えたい。

2. 「長距離競走大会」開催の背景

(1) 『大阪毎日新聞』の販売戦略

まず、明治期の新聞を取り巻く状況を概観したい。日刊新聞は明治初期に創刊が始まった。政論中心の「大新聞」と、社会の出来事などを仮名入りで報じた「小新聞」に大別されたが、明治20年代には両者の境界は不分明になった。日清戦争が勃発すると、新聞は戦況をいち早く報道することで部数を伸ばした⁷。

明治30年代に入ると、日清戦争の報道で拡大した部数を維持する為、読者受けするニュースや読み物の掲載に加えて⁸、新聞社がイベントを開催することで

読者の興味をひきつけるようになった。例えば1897(明治30)年暮には『読売』、『東京横浜毎日』、『都』、『やまと』などの新聞が、狂言、代議士、時計と写真屋、待合、貸座敷などについて、読者参加型のイベントである人気投票を行なった⁹。また、販売部数で『大朝』(以下『大阪朝日新聞』の略称として『大朝』、『大阪毎日新聞』の略称として『大毎』を使用)に水をあけられていた『大毎』は1900(明治33)年1月回向院の本場所の優勝力士に化粧廻しの懸賞を授与するとし、読者には、誰がこの化粧廻しを受領するか「化粧廻し受領力士予想投票」を実施した。的中した読者に懸賞品をだしたのである。この投票の特徴は、投票用紙が新聞紙面に刷り込まれていたことである。すなわち、この紙面を手に入れないと投票出来なかった。これが、新聞に投票用紙を刷り込んで読者参加の投票を行なう「桐原式」¹⁰と呼ばれる新聞販売戦略の始まりである。『大毎』は後に、「素人義太夫」「素人謡曲家」「俳優人気投票」などの投票を相次いで行ない、販売部数を伸ばした¹¹。

このような人気投票について、ライバル『大朝』は「懸賞投票の流行 新聞紙の墮落」と題した社説で痛烈に批判し、両社の間で論戦が繰り広げられることとなった¹²。この論戦は仲裁者の調停により一旦中断されたが、このような論戦が起こったことは、人気投票などの新聞社主催事業が、新聞の広告・販売活動を左右したことを示したといえよう。単にニュースを報道するだけでは販路の維持・拡大が望めなくなったのである。

『大毎』の業務担当社員として営業活動全般に関わった本山彦一¹³は「私は新聞のために編輯する、新聞の天職を全うする目的を以て編輯する。さうしてこれを広めるには、商品を売ると同様に、広めなければならぬ。編輯は決して商売ではないが、編輯したものを売るのは全くの商売である。また、商売の考でなければならぬ」¹⁴という「新聞商品主義」といわれる考えの持ち主であった。すなわち、一定の方針によって編集された新聞であるが、作成された新聞は商品として売られなければ、その新聞には権威も信用もない、という考え方である。新聞の編集と販売を車の両輪のような関係として捉えていたのである。このような方針の下、『大毎』は「桐原式」の「鳴り物入り宣伝」から、公益事業の側面にも配慮しながら読者の人気を演出、動員するという事業企画を推進した。こうした事業の一つに1901(明治34)年に開催された「長距離競走大会」も位置づけられよう。

(2) 時事新報社主催「十二時間の長距離競走」

メディアとスポーツの関わりのはじまりは、メディア・スポーツ・イベントの開催以前に遡る。日本の新聞におけるスポーツ報道の初出は明らかではない

が、明治初年代からスポーツに関する記事が新聞紙上に現れていた。これらの記事は、競馬、相撲、水泳、剣術、自転車、運動会などに関する記事であった。この事実から、近代新聞の発行によってスポーツに関する記事が新聞を構成するコンテンツ（内容）となったと考えてよい。スポーツはまず、メディアのコンテンツとして機能していたのである。

1901（明治34）年10月1日『時事新報』紙上に「十二時間の長距離競走」開催の告知が掲載された。これが日本におけるメディア・スポーツ・イベントの幕開けである。

長距離競走が日本で行なわれた最初は1898（明治31）年2月高等師範学校が行なった「健脚競走」である¹⁵。明治30年代に入ると学校を中心に健脚養成¹⁶を目的とした長距離競走が行なわれるようになった。時事新報社は学校で行なわれていた長距離競走を、一般読者を対象に行なったのである。

では、この「十二時間の長距離競走大会」はどのような大会だったのか、以下にその概略を明らかにしたい。

『時事新報』によると、この大会開催の目的は国民の耐久力の養成（体育の奨励）である。つまり、欧米列強の兵士の強靱な身体に対抗するためには、これまでの体育（耐久力＝体力の養成）では厳しさが足りないので、「十二時間の長距離競走」を行なうと宣言したのである¹⁷。この背景には北清事変における欧米列強との共同出兵で目の当たりにした彼我の兵士の体力の差がある。そして「長距離競走」によって培われた体力が、ひいては国策である富国強兵、殖産興業を支える国民体力の向上に役立つことを伝え、西洋の長距離競走の記録と比較することで目標を明確にし、記録の上で西洋人に対抗し、打倒することを目指したのである¹⁸。

この長距離競走大会は、現在のマラソンのように、決められた距離を走破する速さ（かかった時間の短さ）を競うものではなかった。大会は11月9日午前4時から午後4時までの12時間、会場の上野不忍池畔をひたすら周回し、70マイル（約122キロ強、不忍池畔76周余）以上歩行することを目標とした¹⁹。競技規則、審判、医師の嘱託も発表された。一等賞には金百円、二等賞には金五十円、三等以下でも目標の70マイルを走破すれば金十円づつが授与されることになった。また、大会が近づくにつれ、優秀な成績を収めた選手に贈呈するために、多くの寄贈品が時事新報社に寄せられた。よって、競技の成績次第で『時事新報』からの賞金以外の物品を受け取ることとなった。

大会の参加には長距離を歩行した実績を自己申告する必要があったが、それ以外の制限はなかった。申込者100余名に対して体格検査を行い、その上で15名を選手として選抜した。つまり競技の前に、目標の達成が見込まれる優秀な身

体が選抜されたのである。

『時事新報』は、大会の告知から選手確定の様子、「長距離選手の経歴談」「長距離競走者の練習」などの記事を連載し、大会当日の様子も多くの紙面を割いて報道し、大々的に大会を盛り上げた。

選手は見物客から良くわかるように、大会の為に用意された色分け帽と、白地に赤で「い、ろ、は」が縫い付けられた綿のシャツを着用した²⁰。この長距離競走は12時間の長丁場であり、全力疾走で走り通す競走ではなかった。選手は歩いたり、ゆっくり走ったり、煙草をふかしながら歩いたり、それぞれのペースはまちまちだった。途中で休憩する者、握り飯や餅等を食べながら歩いた者、休憩中にビールやブランデーを飲む者もいた。「長距離競走大会」という初めてのイベントであり、このような大会の実施とその報道は、体育奨励という目的を掲げながら、読者の興味を引く娯楽を提供したといえよう。そして多くの読者を大会に動員することにも成功した。

優勝者は人力車夫の安藤初太郎、記録は65マイル余。目標の70マイルには到達できなかった。完走できなかった選手もいたが(選手15名中9名が完走)、『時事新報』は、競走途中で棄権した者も含め選手一同に大きな負傷がなかったことを報じた。

大会後の社説では、目標の成績は収められなかったが、大会当日は大変盛況であり、体育奨励の目的は果たすことが出来たと表明した。そして、本邦初の催しであり練習が不充分だったこと、前夜の雨の為地面がぬかるんでいたこと等を目標が達成できなかった理由としてあげ、今回の記録が日本人の体力が西洋人に劣るという証拠にはならないことを強調した。そして第二回の大会に目標の70マイルどころか世界記録となる90マイル走破の望みが託されたのである²¹。

『大毎』の「長距離競走大会」は、読者の興味を引く事業を行なうという営業方針を背景に、『時事新報』によるこの大会の成功に刺激を受けて急遽開催されたのである。

3. 大阪毎日新聞社主催「長距離競走大会」

(1) 告知

1901(明治34)年11月24日『大毎』紙上第一面に「長距離健脚競争大会」の告知が掲載された。以下の通りである。

長距離健脚競争大会

東京の時事新報は、本月9日不忍池畔において十二時間七十哩以上の長距離健脚競争会を催はしたり。然るに広言を吐いてその募に応じたる十余名の競争者中一人としてその実を顕はしたるものなく、世人をして東京人の柔弱為すなきを笑はしめたり。我関西には素よりこれ位の脚力を有するもの多々なるべきは、我社の信じて疑はざるところなるをもつて、今回同社の顰に倣ひ、来る十二月十五日（雨天順延）をもつて同様の健脚会を堺大浜旧台場跡に開き、大に関西人士の気焰を高めんとす。尚我社は来年に到り進んで時事新報に戦を挑み、東西の大競争をも試みんとするの考を有せり。関西強健の勇士、冀くは来りて我社の試に応じ、平生の所養を発揮せられよ²²。

先に述べた通り『時事新報』の「十二時間の長距離競走」は、国民の体力の向上（体育奨励）を目的としていた。そして記録の上で西洋人に打ち勝つことを目指していた。しかし『大毎』の「長距離競走大会」開催の目的は、東京を打倒することだった。『時事新報』の大会が「西洋人」を仮想敵としたのに対して、『大毎』は「東京人」（関東人）を仮想敵としたのである。

大会の競技方法は「今回同社の顰に倣ひ」と言う通り、『時事新報』の大会を踏襲したものだった。競技の概則は以下の通りである。

一 競技者中優等に該当する者は八時間内に五十哩（我廿里十六町一間二尺）以上を比較的迅速に歩行し得るものとす。

一 競技者中成績優等者には本社より左の懸賞金品を贈るべし。

一等 金時計 一個 財囊（五十円入）一包

二等 銀時計 一個 財囊（三十円入）一包

三等 財囊（二十円入）一包

外に三等以下のものと雖ども八時間に五十哩を歩行したるものは、金十円入の財囊一包宛を贈るべし。又た有志者にして競技者に金品を寄贈せんとするものは、予め本社へ照会ありたし。

一 競技者の員数は二十名とす。其選定は競技申込者の中、囑託医師（医師の姓名も追て報告すべし）に於て体格を検査し、体格の最も優等なる者より順次選抜するものとす。

一 競技企望者は来十二月二日限り、其住所年齢職業、従来長距離歩行を為したる経験、競技に耐ゆべき自信の理由等を略記し、本社長距離競走係へ申込むべし。但し未丁年者は父兄の証明書を添ゆる事。

一 競技時刻は十二月十五日午前八時より午後四時限とし、飲食の時間も之

に含む。

- 一 競技場は周囲芝生の堤塘なり。優に五万人を容るべし。殊に此挙に關しては南海鐵道会社は本社の交渉に對し、大に賛成を表し、看客の便宜を謀り規則の許す限に於て割引を實行せらるゝ筈なり²³。

『大毎』の「長距離競走大会」では、『時事新報』の「十二時間七十哩」の到達目標よりも競技時間を短く「八時間」、目標距離を少し長い「五十哩」とした²⁴。くわえて、5万人収容可能な会場を設定したり、大会開催に關して最初から南海鐵道の協力を得たりした²⁵。これらは「十二時間の長距離競走」が上野不忍池畔に数万の觀客を集めたこと、当日の鐵道馬車が大幅な増収だったことが『時事新報』紙上で伝えられたからであろう²⁶。以降、『大毎』と南海をはじめとした鐵道会社は主催事業で協力体制をとることになる。情報を載せる新聞というメディアと、人やモノを乗せる鐵道というメディアが結びついたのである。このような協力体制はこれ以前にはみられない²⁷。

(2) 報道と演出

最初の告知（11月24日）から開催（12月15日）までは約20日間。この間『大毎』紙上において連日「長距離競走彙報」という記事を掲載し、「長距離競走大会」に關連する情報を読者に提供した。選手の申込締切は12月2日、選手選考のための体格検査は12月8日に設定された。『大毎』は紙上で大会の告知を繰り返し、同時に会場となる堺大浜旧台場跡の状況や、競技者への寄贈品²⁸、申込に關する注意、申込者の経歴（職業など）や、練習の必要性などを記事にした。それから、体格検査に關する注意や審判委員の紹介、競走当日の服装²⁹などの情報を掲載した。体格検査の様子も詳細に報道され、選手確定（12月10日紙上）後は各選手の経歴を似顔絵入りで紹介した。大会直前には詳細な競技規則や選手への注意³⁰を掲載した。そして大会当日はのべ4面を使用し、詳細に大会の実況を掲載した。大会後は選手のその後の様子や、大会に關するエピソードが掲載された。連日大会に關する記事を掲載し、大会を大いに盛り上げたのである。

そして以下のような記事を繰り返して掲載することで、読者の中に、關東への対抗心と「關西人」であるという意識を育むことになったのである。

長途の競走には必ず練習を必用とす。……中略……服装より履物等に到るまで、能く能く注意を加へ、如何なるものが最も適當なるものなるかを調べし上、体力の疲労する具合を考へ、何時全力を注ぐの利益あるかを研むる等、凡て学理的の研究を積て練習せざるべからず。時事新報社の催せし時に失敗

に終りし如きは日本人の体力の西洋人に劣るの故にはあらず。各自の練習に於て積まざる所ありし結果なるべければ、深く此点に留意して、過を再びせず、大に関東人間の意気地なきを証し、贅六ぜいろくと称するの不礼を謝せしむる様の覚悟を望むなり³¹。

(競走への申込者が)実際此の驚く可き多数に上りたるは、関西の人士に我社の希望が諒せられたる結果に外ならざるべし。即ち時事新報社が催せし十二時間の長距離競走には、能く所定の里数を歩行せしものなく、僅に六十五哩余に達せしものを第一等とし、之を一米人の同時間に九十哩を歩行せしと云ふに比すれば甚だしき隔絶を表はせり。此不成績は實に関東人士が為すなきを証せると同時に、亦我国人全体を為すに足らざるものと他邦人に誤解せしむるの因を作れり。これ我社が深く遺憾とせし所にして、是非関西人士の体質と耐久力とを發表し、関東男子の胆を破するに足るの勇あるを示さんとし、此挙を企てたり。然るに天下皆其意を諒し、健士雲の如く響き応じ二十名の選手に対し六百名の申込者を得たる如き、我社が深く満足する所なり³²。

関西の選りに選りたる健児が関東男児の胆を破し、此一挙に贅六もくとなる蔑称を江戸ッ子に返上せんと意気込みにて万丈の気焰を揚ぐる様を目睹する事、いかばかり勇ましく亦愉快なる事ならん³³。

我社は此一挙により我々関西人士を贅六と蔑視する関東男子の胆を破し却て其為すなきを証せんとする事は屢々しばしば之を公言し來。亦今回の優勝者を以て時事新報社に連合競走を催さん事を申込たり。……中略……今更口先きの達者なる江戸ッ子をしてざまを見ろと言はるゝ如き事ありては、ただ營に諸君一個の恥辱なるのみならず、亦関西全体の恥辱なり。……中略……西人と日本人と身長に於て差異ありとは云へ、六時間未滿に踏破せし里程を八時間にして尚達する能はざる如き事ありては、實に国辱の甚だしきものと云ふべし。諸君こひねがは希くはその練習と摂生とを懈怠けたいし、大にしては国民全体の恥辱となり、小にして各自一己の不名誉となり、併せて我社の面目を毀損せしむる事なかるべきを切に希望の至に堪へざるなり³⁴。

この大会の実施において最重要なのは「八時間五十哩」の目標を達成することである。『時事新報』の轍を踏むわけにはいかない。よって選手確定前から応募者に練習の重要性を伝えた。目標を達成することで「上方贅六」というような中央から地方を見下す態度を見返してやる、という気持ちに溢れていたので

ある。このような言説によって「関東人」対「関西人」の図式の中にこの長距離競走を位置づけ、「関西人」の優秀さを誇示することが重要だったのである。競技直前には「抑も今度の長距離競走会は我国に於て未だ嘗て見し事なき盛挙にして日本男子の体力を試験し幾許の里程を歩行し得るやを判明するにあり。其成績は全国は固より欧州各国に発表さるゝ事にして実に愉快至極の催しなり。……中略……諸氏は日本男子の代表者たる覚悟を以て十分なる好成績を挙げられたし」³⁵と審判長が演説した。「関東人」に打ち勝つだけでなく、「関西人」（日本男子）の体力が西洋人に劣るものではないことを証明しようとしたのである。

このような紙面による盛り上げが功を奏し「長距離競走大会」への申込者は653名に上った。この中から体格検査を実施し20名の選手を選んだ³⁶。

大会は、岡山県美作の桶屋、村瀬百蔵が112回周回（約五十六哩）し優勝した。5着までが目標の五十哩を走破、5名が途中棄権した。「競技者各員の見事なる成績によりて充分満足すべき結果を収め、我社掛員の喜びより優等者諸氏の喜びより、関西男子の面目の為に誠に慶賀すべき大記念日とはなりたり」³⁷というように、大会は成功裏に幕を閉じた。

大会開催の目的を「打倒関東」とした告知³⁸、大会に関する連日の報道は、読者の共感と呼び、大会当日は10万もの観客を集めたという³⁹。

関西で初めての大規模なスポーツ・イベントであったこと、「関東人」対「関西人」という対立の図式が単純化して示されたこと、競技規則や選手の経歴、選手への注意などが詳細に掲載されることで観客に対する便宜が図られたことなどが、多数の観客を集めた理由としてあげられる。継続的な報道は読者の、読者を「長距離競走大会」に取り込む為の演出として効果を発揮したのである。そして読者は他人事ではなく、自分のこととして、「長距離競走大会」に感情を移入したのである。つまり『大毎』は、記事を通じて読者と選手を一体化させたのである。

(3) メディア・スポーツ・イベントの機能

アンダーソンは、人々がほとんど同時に新聞紙上の情報を消費することによって、新聞が近代国民意識の形成に果たした役割を明らかにした。日々同時に大量消費される商品としての出版物（新聞）が、読者の間に新しい同時性の観念を生み出したのである。そして資本主義の生産システムと、印刷・出版というコミュニケーション技術が結びついた出版資本主義が「国民」（＝イメージとして心に描かれた想像の政治共同体）の創出に大きな役割を果たしたのである⁴⁰。新聞をはじめとした活字メディアが全国に広がることによって、読者は紙

上に提示された等質の価値観を受け取った。同じ価値観を共有することで読者自身の感性が均質化することになった⁴¹。これが同じ感性を共有する「国民」の創出を後押しすることになったのである。

この視点から「長距離競走大会」の報道を見直すと、「長距離競走大会」に関する報道によって読者の間に「関東人」に対する「関西人」という「想像の共同体」を創出したことは明らかである。

これは、告知で繰り返された「関西人」が「関東人」を打倒するという「物語（ナラティブ）」⁴²の創出による。これが「長距離競走大会」の大きな「物語」である。そしてこの「物語」は、選手個人の経歴や競技規則や競技上の注意という小さな「物語」によって補完されたのである。

また、体格検査に関わる報道などを通して選手の身体を紙上に再現したことは、理想の身体を可視化することになった。こうして読者は、「健脚をもつ身体」が優位な身体であるという価値観を共有したのである。

先に述べたように、「物語」を共有することで選手と読者は一体となった。『大毎』は、「長距離競走大会」にこのような様々な「物語」を付与することで関心のない読者を記事の中に引き込んだのである。

メディア・スポーツ・イベントに「物語」が加えられる。そうすることで、長距離競走はより大きい意味の体系の中に位置づけられた。単なるスポーツ・イベントではなく「物語」を流通させたのである。この「物語」は一方通行の解釈を読者に提示した。つまり、「関東人」に対する「関西人」の優位性の誇示と、それによって「日本人」と「西洋人」が対等であることの証拠の提示である。紙上ではもともとこの「物語」が新聞の販売戦略のために創出されたということは封印された。こうした単一の解釈の「物語」の提供が、等質の感性を共有する共同体を創出したのである。

しかしながら、この大会以降も、メディア・スポーツ・イベントが新聞の行なう事業企画の中心を担ったわけではなかった。新聞社はこれ以後、長時間にどれくらいの距離を歩行することができるか、という形式の長距離競走大会を開催していない。そしてこの大会以降、継続してメディア・スポーツ・イベントが行われたわけではない。つまり、メディア・スポーツ・イベントとしての長距離競走大会開催の価値は認められたものの、新聞社にとっては利益が少なかったと考えられる。

毎年のように新聞社がスポーツ・イベントを開催するようになるには、大会がより競技化し、読者によりわかりやすく提供される必要があったと考えられるだろう⁴³。

4. むすび

ここまで、草創期のメディア・スポーツ・イベントの実態について明らかにしてきた。これらを踏まえた上で、本稿の課題であった「そもそも、なぜメディア・スポーツ・イベントが注目されるようになったのか」という問いに答えたい。

メディアとスポーツの結びつきは、日刊新聞の発刊に遡る。スポーツに関する記事は新聞を構成するコンテンツであった。メディア・スポーツ・イベントが開催されたのは、端的に新聞の販路拡大のためである。しかし販路拡大の思惑は、「物語」を付随した報道によって別の機能を果たすことになった。すなわち、共同体の創出である。これが、現在に至りメディア・スポーツ・イベントが注目される理由の一つである。そして共同体の創出という機能を果たす上で、重要な役割を果たしたのがメディア・スポーツ・イベントの「物語」化であった。

同時に流通する新聞によって、人々は「時間」と「空間」を共有するようになった。そして、同じ感性を持つ共同体を構成することになった。新聞の提示する「物語」によって、共通の感性、価値観、身体観を醸成したのである。このような感性の共有は無意識のうちに「国民」（＝イメージとして心に描かれた想像の政治共同体）という意識を形成した。感性の共有が共同体への帰属を確認するからである。こうして「想像の共同体」としての「国民」が誕生したのである。

『大毎』の「長距離競走大会」に関する報道において、読者はまず「関西人」という共同体の構成員であることを確認した。「国家」がこのような複数の共同体の複合である以上、日本におけるメディア・スポーツ・イベントは、その草創期からナショナリズムと親和していたということが出来よう。これはすなわち、メディア・スポーツが共同体意識の形成を促進し、「国民」化を強化する機能を担ったということである。

この「物語」の影響力は大きく、現在に至っても、メディア・スポーツと「物語」はお互いに補完する関係が継続しているのである。

注

- 1 原田宗彦：『スポーツイベントの経済学 メガイベントとホームチームが都市を変える』、平凡社新書、2002年。

松村和則編：『メガ・スポーツ・イベントの社会学 ―白いスタジアムのある風景―』、

南窓社、2006年 など。

また、福岡市が2016年のオリンピック夏季大会招致に名乗りを上げたが、僅差で東京に敗れ国内立候補都市となることが出来なかったこと（2006年 8月30日）は記憶に新しい。東京の招致計画は、北京（2008年夏季大会）、ロンドン（2012年夏季大会）がそうであるように、首都圏の再開発を睨んだものであった。

- 2 中村敏雄編：『スポーツメディアの見方、考え方』、創文企画、1995年。
広瀬一郎：『メディアスポーツ』、読売新聞社、1997年。
『体育の科学』、特集メディア・スポーツ論、Vol.47、1997年。
『現代スポーツ評論』、2、特集メディア・スポーツへの視線、創文企画、2000年。
神原直幸：『メディアスポーツの視点』、学文社、2001年。
橋本純一編：『現代メディアスポーツ論』、世界思想社、2002年 など。
- 3 石田英敬：『記号の知・メディアの知』、東京大学出版会、2003年、P.83-85。
- 4 原田宗彦：「メディアスポーツ」、(社)日本体育学会監修：『最新スポーツ科学事典』、平凡社、2006年、P.205。
- 5 メディアが関わるイベントは、メディア・イベントといわれる。吉見はメディア・イベントの概念が次の三つの意味の層を持っていることを指摘している。
つまり、メディア・イベントとは①新聞社や放送局など、企業としてのマス・メディアによって企画され、演出されていくイベント、②媒体としてのマス・メディアによって大規模に中継され、報道されるイベント、③メディアによってイベント化された社会的事件をさす（吉見俊哉：「メディア・イベント概念の諸相」、津金澤聰廣編著：『近代日本のメディア・イベント』、同文館、1996年、P.3-5）。大阪毎日新聞社主催の「長距離競走大会」は、これらの性質を包含する。その意味で、メディア・スポーツ・イベントである。
- 6 拙稿：「日本におけるメディア・スポーツ・イベントの形成過程に関する研究 ― 1901（明治34）年 時事新報社主催「十二時間の長距離競走」に着目して―」、『スポーツ史研究』、第20号、2007年、P.51-65。
- 7 佐々木隆：『日本の近代14 メディアと権力』、中央公論新社、1999年、P.129-130。
- 8 「日清戦争以後の新聞界は主として営業本意、読者本位に傾き 新趣向の競争、号外付録の競争 広告の競争、定価の割引等営業本意の競争が行われた。然して各紙皆中流以下の読者を集むることに苦心し、新聞紙の調子概して通俗的となり、戦前に比して紙面の体裁は全く一変した（小野秀雄：『日本新聞発達史』、大阪毎日新聞社 東京日日新聞社、1922年、P.250。）」
- 9 井川充雄編：「新聞社事業史年表」、津金澤聰廣編著：『近代日本のメディア・イベント』、同文館、1996年、P.351。
- 10 創案者「桐原捨三」の名をとってこう呼ばれた。
- 11 毎日新聞社社史編纂委員会編：『毎日新聞七十年』、毎日新聞社、1952年、P.68-71。
奥武則：『大衆新聞と国民国家』、平凡社、2000年、P.44-67 など。
- 12 津金澤聰廣：「大阪毎日新聞社の「事業活動」と地域生活・文化 ―本山彦一の時代を

- 中心にー」、『近代日本のメディア・イベント』、同文館、1996年、P.217-248。
- 13 1903（明治36）年に社長に就任。
- 14 毎日新聞社社史編纂委員会編：『毎日新聞七十年』、毎日新聞社、1952年、P.96。
なお、本稿の引用文中の旧字は新字に改めることとした。
「売れるといふことに就いては、多少の読者の機嫌も取らねばならぬ。もちろん新聞には主義本領がある。この新聞の主義本領を少しも冒されることなくして、しかも安く売らず、その間に好評を得るには、多少人気に投ずることに努めて行かねばならぬ」との見解もあった（毎日新聞社社史編纂委員会編：同上書、P.97）。
- 15 木下秀明：『スポーツの近代日本史』、杏林書院、1970年、P.56-57。
- 16 健脚とは足が丈夫で長い距離を歩けることをいう。当時は人々の体力を示す目安であった。軍隊における行軍や、学校の遠足は健脚養成を主目的のひとつとしていた（棚田真輔・青木積之介：『阪神健脚大競走』、憐いせだプロセス、1988年、P.5）。
- 17 「十二時間の長距離競走」、『時事新報』明治34年10月1日 第4面。
- 18 拙稿：前掲、P.56-57。
- 19 「世界に於ける長距離競走」、『時事新報』明治34年10月2日 第5面。
この記事は長距離競走の世界記録の紹介記事である。目標とした70マイルの走破時間の記録は「リッツルウッド」の9時間3分15秒。また「ラウエル」が12時間15秒で90マイルを走破した記録などが紹介された。本邦初の試み故、当時の世界記録の基準よりも低い、12時間70マイルという目標が設定されたと考えられる。
- 20 「競技者のいろは分け」、『時事新報』明治34年11月8日 第5面。
「い、ろ、は」は、係員が抽選の上、各選手に振り分けた。
- 21 「社説 長距離競走」、『時事新報』明治34年11月13日 第2面。
しかし、結局第二回の競走は実施されなかった。この大会が「残酷である」という批判記事が書かれ、「体育が体害か」という議論が起こったことが原因の一つと考えられる。
- 22 「長距離健脚競走大会」、『大阪毎日新聞』、明治34年11月24日 第1面。
句点、読点は引用者による（以下の引用も同じ）。
「長距離健脚競争大会」と告知したのは最初に掲載されたこの記事だけで、11月25日以降の告知では「長距離競走大会」と標記している。
- 23 「長距離競走大会」、『大阪毎日新聞』、明治34年11月24日 第1面より一部抜粋。
- 24 時事新報社主催「十二時間の長距離競走」での開始から8時間後の記録は約48哩だった。（「長距離競走場の哩数表」、『時事新報』明治34年10月27日 第5面、「十二時間の長距離競走」、『時事新報』明治34年11月10日 第5面）
- 25 のちに関西鉄道、高野鉄道も運賃の割引を発表し、この大会の盛り上げと集客に協力した。
- 26 「未曾有の人出」、『時事新報』明治34年11月10日 第9面、「一昨日の鉄道馬車収入」、『時事新報』明治34年11月11日 第5面。
- 27 以降、新聞社事業と鉄道とのタイアップが頻繁に行なわれるようになった。『大毎』が

主催したメディア・スポーツ・イベントである1905（明治38）年の「海上十哩競泳」では阪神電鉄、高野鉄道（のちに南海）、1909（明治42）年の「マラソン大競走」では阪神電鉄、1912（明治45）年の「大阪箕面山野横断競走」では大阪電気軌道（のちの近鉄）、箕面有馬電気軌道（のちの阪急）が増便や割引などを行い、大会の盛り上げと集客に協力した。

また1906（明治39）年には、前年の「海上十哩競泳」の盛況をうけて、阪神沿線に打出海水浴場、南海沿線に浜寺海水浴場（浜寺水練場）を開場した（浜寺水練場は大正11年に浜寺水練学校と改称。現在も毎日新聞大阪本社^{クロッスカンントリーレース}の事業として毎夏、浜寺公園内で開校している）。『大毎』は浜寺で多くの事業を南海とタイアップして行なった。沿線郊外に各種メディア・イベントを配置することで、新聞と鉄道とのタイアップによる沿線郊外開発のモデルとなったのである（津金澤：前掲）。

- 28 選手への寄贈品があるたびに逐一紙上で紹介した。優勝者が得ることが出来た賞品（寄贈品）は金張りの懐中時計や優勝旗、金メダルや足袋など38点以上になった。
- 29 競争当日は、背中に大毎の徽章（星型）を入れ、その中に「い、ろ、は」の文字を染めた赤いメリヤスの運動シャツをユニフォームとした。選手は周回を重ねる毎に色違いの襷を纏い、観客はこの襷の色で周回を判断することで順位を確認できた。
- 30 睡眠を充分とること、禁酒すること、食物に注意すること、スタート時の注意などについての記事が掲載された。
- 31 「長距離競走彙報」、『大阪毎日新聞』、明治34年11月28日 第7面。
- 32 「長距離競走彙報」、『大阪毎日新聞』、明治34年12月3日 第7面。（ ）内引用者。
- 33 「長距離競走彙報」、『大阪毎日新聞』、明治34年12月4日 第7面。
- 34 「長距離競走彙報」、『大阪毎日新聞』、明治34年12月11日 第7面。
- 35 「審判長小嶋少将の演説」、「長距離競走大会」、『大阪毎日新聞』、明治34年12月16日 第5面。
- 36 体格検査出席者は365名。一人につき医師三名が内臓病の有無、筋肉のつき方、肥瘦の程度を検査し、その上で99名の再審査受験者を選んだ。そして再審査受験者を数分疾走させ脈を測定し、34名の合格者を決定。この中から抽選で20名を選出した。
- 37 「長距離競走其後の競技者」、『大阪毎日新聞』、明治34年12月17日 第7面。
- 38 「元来今回の長距離競走大会は聊か吾社が体育奨励の一端にもならんかと举行せるものに他ならざれば志望ある人ならんには其職業の如何を問ふ処にあらず。」（「長距離競走彙報」、『大阪毎日新聞』、明治34年11月26日 第7面）という、体育奨励が目的の一つであるとする記事もあったが、「体育奨励」がはっきりと紙面に出てきたのは、この記事のみだった。
- 39 「長距離競走其後の競技者」、『大阪毎日新聞』、明治34年12月17日 第7面。
とはいえ、紙上には5万人収容の会場と発表されたが、実際にはそれほどの大人数を収容できなかったとも考えられる。10万人の観客という発表も誇大な表現である可能性は高い。詰まる所、これまでに無かった程多数の観客を集めたという意で理解するべきであろう。

- 40 ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳：『増補 想像の共同体』、NTT出版、1997年、P.47-87。
- 41 「ある出来事が起こる。それに対して人々はいろいろな感情を抱く。出来事は何も国家全体に関わる、たとえば対外戦争といった大きなものでなくていい。日常起きる些末な事件でもいい。出来事に限定する必要もない。日々の生活の中で人々はさまざまな状況を経験し、さまざまな物事に会い それぞれの場面で多様な感情を抱く。私が『感性の均質化』と呼ぶのは、こうした場面において人々が抱く感性的なレベルでの反応が均質化していく事態である（奥武則：『大衆新聞と国民国家』、平凡社、2000年、P.63。）」
- 奥は、例えば新聞紙上で行われた人気投票による俳優の序列は、もともと人々が俳優に持っていた多様な好みに秩序を与える役割を果たしたと指摘している。
- 42 「物語」は、共同体の中で、その共同体に帰属するものたちによって共有される。ある「出来事」が「物語」となるとき、その「出来事」の記憶の分有が求められる。つまり、「物語」を通じて「出来事」の記憶を共有するのである（岡真理：『記憶／物語』、岩波書店、2000年）。よって「物語」の共有が共同体を担保するともいえるだろう。
- 43 この大会の次に開催されたメディア・スポーツ・イベントは1905（明治38）年に『大毎』が主催した「海上十哩競泳」である。

本研究の一部は平成19年度福岡女子大学研究奨励交付金（競争枠）の助成を受けたものである。